

土木技術者の気概の起源¹

東京工業大学大学院 正会員 藤井 聡 Satoshi FUJII

気概の低減

土木学会ほど「気概」なる精神を尊重してきた学会は無いのかも知れない。このことは、産・官・学のいずれの組織にあっても土木系の部局において見いだされるのではなからうか。事実、平成 15 年度の土木学会全国大会では、御巫清泰第 91 代土木学会会長より、「土木技術者の気概の高揚を目指して」と題した提言がなされており、その中で、土木技術者の気概の実態データを踏まえつつ、新しい時代の土木学会、ならびに土木技術者の方向性が示されている。

表 1 は、その中で報告されたアンケート結果の一部である。この表に示されるように、55 歳のベテラン技術者においては、大半（75%）が現在の仕事に使命感と気概を持つ一方、若手技術者ではその割合が 62% という水準にとどまっている。同様に、大半（72%）のベテラン技術者は「我々の世代は仕事に誇りを持っている」と感じている一方で、若手技術者においてはその割合はおおよそ半分の水準（38%）にしか過ぎなかった。世代間のこの数値の開きを大きいと見るか小さいと見るかは意見の分かれる所であるかも知れない。しかし、時代を経るにつれて、自らの仕事に対する誇り、ならびに、気概が低減しつつあることを示すものであることは間違いないだろう。

なぜ、こうした事態がもたらされたのだろうか。

気概とは何か

気概についての最も代表的な定義はプラトンの「対話篇・国家」の中に見いだされる。彼は、国家の中には、次のような 3 種の人間がいると考えた。

- ・哲学者：真なるもの、美なるもの、善なるものを

見極め、継承し、国家を統べるもの。

- ・補助者：真なるもの、美なるもの、善なるものを護ることを通じて、国家を護ろうとするもの。
- ・放蕩者^{ほうとう}：真なるもの、美なるもの、善なるものを知らず、盲目的に欲望を求める者。

そして、これら三者は、比喩的に次のような三つの存在で象徴される。

- ・哲学者 - 人間
- ・補助者 - ライオン
- ・放蕩者 - 怪物

しかる後に、彼はこの三つの存在は、一個人の内に同居していると主張する。すなわち、一個人の中には、人間的な部分と、ライオンの部分と、怪物的な部分があることを主張する。そして、それぞれの部分は、次のように名付けられた。

- ・哲学者 - 人間 - 理性
- ・補助者 - ライオン - **気概**
- ・放蕩者 - 怪物 - 欲望

すなわち、気概とは護るべき真・善・美を護ろうとする精神である。ここで、「護る」という行為には、常に危険が付きまとうことを踏まえるなら、

気概とは、自らのことを顧みず、護るべきものを守ろうとする精神である

と定義できよう。

さて、以上の議論によるなら、理性、欲望と同程度に重要な心的要素として気概が定義されている。しかし、「理性と欲望」という言葉は日常的にもよく見聞きするものの、「気概」という言葉は、ほとんど見聞きすることはないのではなからうか。これは、古代ギリシャの議論を現代日本に当てはめることに無理があることを意味しているのだろうか。

表 1 若手土木技術者の気概の低下傾向

	ベテラン(55歳) 83名	若手(30歳) 71名
現在の仕事に使命感・ 気概を感じている割合	75%	62%
(我々の世代は)誇りを 持って仕事をしている	72%	38%

¹ 本稿は、平成 15 年度の土木学会会長提言に向けた第一回会長提言特別委員会（平成 15 年 6 月 20 日）にて筆者が報告したレポート「気概について」を基本として、序文を加えつつ再構成したものである。本稿執筆の機会を与えて下さった御巫清泰第 91 代土木学会会長をはじめ、特別委員会委員各位に深謝の意を表したい。

否——、現代日本においてもプラトンの議論と極めて類似した議論がなされている。例えば、三島由紀夫は「文化防衛論」という評論を晩年（1969年）に遺している。この評論は彼の死後現在に至るまで、いわゆる社会学者たちに取り上げられることはほとんど無かったものの、戦後論壇における日本文化論に大きな影響を及ぼしたものとして知られている。その中で彼は、古今和歌集や平家物語等の古典を踏まえつつ、日本文化とは「菊と刀」の文化なりと論じている。ここに、「菊」は日本的なる美意識を象徴し、「刀」はその美を護る精神を象徴している。菊（美）はひ弱なる存在である以上、護らなければ瞬く間に汚されてしまう。一方、護るべき菊がなければ、瞬く間に刀は錆び付いてしまう。かくして、菊が菊たり得るためには刀が、そして、刀が刀たり得るためには菊が不可欠である。この両者の無限の連関こそ、連綿と受け継がれてきた日本文化の本質に他ならない——。

この議論は、菊と刀という日本的なるものを援用しつつ日本文化を論じたものではあるが、それは文化一般の本質を論じたものに相違ない。ここで菊を「真・善・美」、刀を「気概」と呼ぶなら、三島はプラトンと全く同じ内容を異なる言語を用いて論じていたと言えるだろう。プラトンがライオンと象徴的に語った気概を、三島は刀と象徴的に語ったのである。

さて、三島は以上の議論に引き続いて、戦中と戦後の日本文化についてさらに論を進めている。戦中の日本は刀の精神が菊の美意識を脅かすという形で歪いびつなるものであった一方で、戦後の日本は刀の精神が蔑ろにされ菊だけがもてはやされるという形で、歪なるものになり下がったと指摘している。現代の日常において「気概」という用語をほとんど見聞きしなくなったのは、こうした背景によるものであろう。

土木技術者における気概

言うまでもなく、プラトンと三島が気概を論ずるにあたって直接的に想定した職業は「戦士」であった。しかし、プラトンも三島もそうした比喩を通じて、気概とは何であるかを論じているに過ぎない。すなわち、私心を捨て、自らのことを顧みずに護るべきものを護る精神、それこそが気概なのである。

だとするなら、土木技術者において気概が重視されてきたのは必定である。

土木技術なくして、いかにして津波や地震や洪水から人々の生命と財産を護ることができるのだろうか。衣食足りて礼節を知るといふのなら、社会生活の基盤無くして、いかにして我々はそれぞれの土地に受け継がれた伝統と文化、そしてその中に胚胎する美なるものを護ることができるのだろうか。

無論、プラトンが考えたように、生命と財産の守護のためには戦士が必要であろう。そして、三島が主張したように文化は言葉に、そして言葉は文学に支えられる。しかしながら、人々の暮らしを支える社会基盤無くして、戦士や文学だけで生命と財産と文化を護ることができぬこともまた事実ではなかるうか。

だからこそ、理性、欲望ではない、気概こそが、土木技術者が土木技術者たり得るために不可欠な基本精神なのである。土木技術なる刀を携え、護るべきものを護るべしと構える姿、それこそが土木技術者なる職業の本来の姿である。

変わらない土木技術者の気質

気概の精神が、土木技術者なる職業における本質的精神であるとするなら、冒頭で指摘した若手技術者の気概の低下傾向は、なぜもたらされたのか。

理論的には次の二つの理由しか考えられない。時代と共に土木技術者の精神構造そのものが変質したのか、あるいは、基本的な精神構造は変質していないものの、土木技術者が置かれている状況そのものが変質したか、のいずれかである。

ここで、先に述べたアンケートでは、「土木技術者・研究者としての生き甲斐を持って行く上で何が重要ですか？」という質問について、30歳と55歳のサンプルのそれぞれでほぼ共通した回答が得られていることが示されている。すなわち、いずれにおいても、

「人々の生活の利便性・安全性を向上させる」

「地域住民や社会から喜ばれ評価される」

「技術力を大いに生かした仕事を行う」

が重要と答えたのが90%前後、

「国の発展に貢献する」

が重要と答えたのが75%程度であった一方で、

「スケールの大きなプロジェクトに携わる」

「会社や役所などで十分な処遇や待遇を得る」

が重要と答えたのは3、4割程度にしか過ぎなかった。

このデータは、今も昔も、土木技術者は待遇や大きなプロジェクトに関わる事による満足感等の「私」的な悦びよりはむしろ、人々の生活や地域や国といった「公」に貢献することに生き甲斐を見いだしている、という事を示している。いわゆる滅私奉公の気質を、今も昔も土木技術者は携えているのである。

だとするならば、若手技術者の気概低下の理由の一方、すなわち、「基本的な精神構造が変質したが故に気概が低下している」という可能性を、我々は棄却せざるを得ない。そして、土木技術者が置かれている状況が変質したが故に、気概が低下しつつある、というもう一方の理由を受け入れねばならない。

気概の心理学

ここで、人間の心理的な側面にさらに踏み込みつつ、土木技術者の気概について検討を進めてみたい。社会心理学では、どのような条件が揃えば自らを顧みずに他者を助ける行動をとるのか、という点に着目した様々な研究が蓄積されている。一般に、社会心理学ではこうした行動は、「利他的行動」と呼ばれており、その代表的な理論が「規範活性化理論」である（藤井、2003参照）。この理論に基づけば、利他的行動が生ずるには少なくとも次の二つの意識が必要とされる（図1参照）。

- ・そこに重大な問題がある、という危機感。
- ・それを護るのは他ならぬ自分である、という責任感

例えば、川で溺れる子供を見たとき、「これは大変だ」と考え（危機感）そして、「他に誰も助ける人はいない、私が助けてやらねば」（責任感）と考えるからこそ、人は、後先を考えずに川に飛び込んでしまう。

さらに、「責任感」が活性化されるには次の二つの要因が重要となる。一つは「能力」、もう一つは「他者からの期待」である。溺れる子供を見たとしても、自らに泳ぐ能力がないのなら、助けられぬのも致し方なし、と考えてしまうかも知れない。一方、「誰かあの子を助けてやって下さい！」と叫ぶ母親がいる状況を想像してみれば、他者からの期待が責任感の活性化にとって

極めて重要であることは容易にご理解頂けよう。

以上の議論に基づく、土木技術者の気概は次の3つに左右されるであろうことが予想される。

- 専門家としての能力「我々の土木技術をもってすれば、護るべきものを護ることができる」
- 社会（他者）からの期待「我々土木技術者に対する、社会からの大きな期待をひしひしと感ずる」
- 危機感「護るべきものが危機にさらされている」

若手技術者の近年の気概の低下傾向は、これらの中のいずれに因るものであろうか。

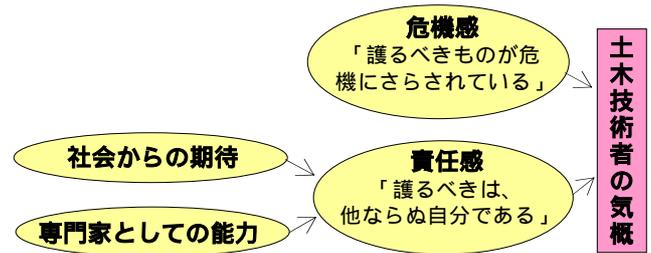


図1 規範活性化理論に基づく気概形成プロセス

気概低減の本質的原因

まず、「専門家としての能力」については、30歳サンプルも50歳サンプルもその約9割が、技術力を大いに生かした仕事を行うことに生き甲斐を感じているという点を鑑みるに、今も昔もさほど変わらないようである。

「社会からの期待」についてはどうだろう。この点については、土木学会誌2004年4月号の「土木逆風世論の真実」にて筆者が実証データに基づいて論証したように、人々が「(自分以外の)世間の人々は土木事業に反対している」と思いこんでいる点を改めて指摘したい。すなわち、我々は「土木事業は社会から何も期待されてはいない」と思いこんでいる。これこそ、若手技術者の気概が低下しつつある第一の原因であろう。

しかし、筆者が上記原稿に示した実証分析によるならば、その思いこみは事実と乖離していることが明らかにされている。すなわち、現実の人々は必ずしも土木事業に対して決して否定的ではなかった。この事実を踏まえるならば、土木技術者は「我々は、社会から何も期待されてはいないのだ」などと卑屈なる態度に身をやつす必要はないのではなからうか。

「『護るべきものが危機にさらされている』という危

機感」についてはどうだろう。確かに、終戦直後の焼け野原を目にした土木技術者は、為すべき仕事は膨大なりと感じたことであろう。しかし、戦後の復興期を経て高度成長を成し遂げ、社会資本が蓄積されつつある現代、焦土を眼前に心に沸き立った危機感が希薄化したとしても、やむを得ないことなのかもしれない。おそらくこれが、土木技術者の気概が低減しつつある第二の、そして最も本質的な原因である。

しかし――。

確かに、我々の眼前から焦土は消え失せたのかも知れない。しかし、津波の脅威を思い起こすなら、先の阪神淡路大震災を思い起こすなら、そして、いつの日か訪れるかもしれぬ首都圏での大地震を想像するのなら、多くの国民の生命と財産が危機にさらされていることは疑いようの無い事実である。にも関わらず、人々は危機など無いと信じこみたいという“願望”を持ち、その願望故に、危機など何も無いかのように日々を暮らしてしまう。遺憾としか言いようのない事態ではあるが、これがリスク心理学なる学問が教える現実である。だとするなら、仮に全ての国民が危機を忘れ去ったとしても、土木技術者だけはそのにある危機を冷静に見つめ、備え続ける必要があるのではなかろうか。

都市部では日本の至る所で中心市街地の衰退が進行している。それに伴い、それぞれの街に受け継がれた風土や伝統が無くなりつつある。例えば、京都の“まちや”は年々減少し、町並み景観はおおむね破壊され、長い歴史の中で連続と受け継がれてきた伝統産業の多くは存亡の危機に立たされている。一方で、地方部では至るところで過疎化が進行し、地域に息づく風土や伝統はその担い手なる人口の減少に伴って、一つずつ消え失せつつある。この流れを堰き止めるために、都市と交通の諸行政と国土計画に関わる土木技術者、そして、それぞれの地域の社会基盤の整備と運用に関わる土木技術者は、重大な役割を担わざるを得ないのではなかろうか。

一昔前、例えば幼少の頃を思い起こすなら、それぞれの地域には、その土地々に受け継がれた美しきものがあつたのではなかろうか。それがいつのまにか一つずつ消え失せ、赤や黄色の看板やのぼりを掲げる大規模ショッピングセンターやコンビニエンスストアが立ち並ぶ風景に変わってしまった地は、おびただしい

数に上るのではなかろうか。繰り返すが、戦後半世紀以上を経て、我々の眼前から目に見える形での焦土は無くなった。しかし、今一度大きく目を見開いてみるのなら、一面的な効率主義や商業主義に席卷された、精神の焼け野原とでも言うべき焼けただれた風景が、我々の眼前に広がっているのではなかろうか。

この焦土を復興するために何が必要なのだろう。そのために必要とされるであろう長い年月を伴う真に総合的な取り組み――、その中で、人々の暮らしと社会基盤の双方を見据えた総合技術たる土木技術が不要であることなど、あり得るのだろうか。美しい国土を護る、それが土木技術者の究極の任務であることを、誰が否定できようか。

土木技術者の責務

時代を経るにつれ、土木技術者の気概は低下しつつある。その原因を探り、浮き彫りとなったのは、何をするにも世論から批判され、やる気をなくしつつある技術者の姿であった。護るべきものなどどこにも無く、自らの使命など無いとあきらめつつある技術者の姿であった。しかし、人々は土木に対して必ずしも批判的ではないのだ。そして、多くの国民が天災の危機にさらされ、美しい国土が破壊されつつある現実が厳然としてあるのだ。だとするなら、我々土木技術者には、気概を無くし、為すべき仕事を放置し続けている暇^{いとま}など、ありはしないのではなかろうか。

無論、為すべき仕事の具体の内実は個々の立場によって様々であろう。万一、為すべき仕事は何一つとして見いだせぬのなら、一も二もなく身を引くばかりである。しかし、為すべき仕事が見いだせるのなら、例え現世の誰からも評価されず感謝されずとも、為すべき仕事を為していく他に道はない。いかなる状況にあっても、真の気概を携え続けることは容易ならざることなのかも知れない。しかし、それは決してできぬことではないのだ。

参考文献

- 藤井 聡 (2003) 社会的ジレンマの処方箋：都市・交通・環境問題のための心理学, ナカニシヤ出版。
藤井 聡 (2004) 土木逆風世論の真実, 土木学会誌, 89, (4), pp. 72-75.